

“考古フアンのじゃれごと” ②

吉備から見た弥生時代晩期から古墳時代の始まり

日本先史古代研究会 会員 山崎泰二

現在の我々は弥生人(人種)の延長に存在

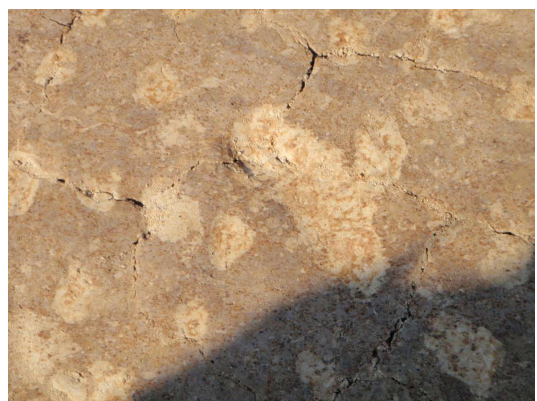
中国の江南地方で発生した水耕稲作が、朝鮮半島や直接海流に乗って日本列島に渡来したことは学者の皆さんの研究で定説化し、弥生土器から弥生時代と呼称する。それ以前に1万2000年もこの列島で生活していた縄文人は(縄文時代と称する)、主に山野で小動物を狩猟し果実を採取しまた海や川から魚や貝を採り、移動しながら生活をしてきた。そこに「水耕稲作」の新技术を持ち込んだ我々の祖先が、土地を占有し定住しながら急速に日本列島を寡占した。今から2500年昔の出来事である。押し出された縄文人は列島の片隅に追いやりられ駆逐されたと信じられていた。しかし最近のDNA技術の発達で縄文系の混在が確認されつつある。私は「戦闘好きな弥生人が未発達の縄文人を駆逐した」のではなく、「戦闘行為を伴わないで同化」したと信じたい。

その根拠は、もともと縄文人は焼畑耕作で稲作をしていた事実である。縄文貝塚から出る多量の穀物の内「稲」の痕跡が多いと、高橋護教授は長年の研究の結果から述べておられます。残念かな稲=米は「連作」が出来なく、やむを得ず焼畑を2・3年で放棄し、移動しながらの栽培になり収穫量も限定されていた。人口密度も弥生時代に比べると極端に低いとの推計もなされている。しかし縄文人はお米の「味」を知っていた。他の果実や穀物に比べ美味しく貯蔵が出来持ち運びも簡単である。そこに連作の可能な新技术を持って登場した弥生人の水耕稲作を垣間見て、感服・敬服したと想定する。いったん耕地にすると何度でも使え、新しい耕作地は次の生産に拡大発展する。苦勞して焼畑を開墾しても2・3年で放棄しなければならない縄文陸稲は、新しい移住民である弥生人にはかなわない。戦う前に降参である。もともと耕作地の場所が違っていたこともあって、縄文人と弥生人の交錯は少なかったと思います。

弥生人の水耕稲作の日本列島における進展は、中国や朝鮮半島に比べて加速度的と思えます。約紀元前500年前に九州島北部に上陸した弥生人は、稲=米の連作障害を「水耕稲作」をすれば、同じ場所で毎年耕作が可能な技術を持ち込み、日本列島の「瑞穂の国」にて新技术が大きく開花しました。それから弥生時代の終末期(西暦200年代)には、稲作の中心地は北部九州から我々の吉備一帯に移ります。すでに今の畿内から東海に水耕稲作は伝播し、北陸の南部まで広がっていたと想定できます。これが通説になっているようです。しかも当時今日と近い方法での「田植え」が吉備で行われていたのです。百間川遺跡で自然の偶然が重なり綺麗な稲株の跡が出現しました。稲は程よく成長しているところに、小さい砂粒が30cmも覆って来る洪水になり全滅してしまいました。「小さい砂粒」は稲株に付着し、付近には逃げまどう弥生人の足跡まで残しているのです。平成22年11月20日の山陽新聞に大きく報道されました。



百間川遺跡の水田跡 2010.11.21の現説



稲株の跡と弥生人の足跡 2010.11.21の現説
中央右の長楕円が弥生人の足跡

稲株は専門家の説明で「田植え」をしていると断定しています。約2000年前吉備の先人は「田植えをする技術を開発」していたのです。稲の品種はジャポニカで基本的には今と変わりはありません。平らな所ではそこそこの

広さの田圃です。高低差のある場所では小さい田圃の区画で、畝や畦で水の管理がしやすいように工夫されています。大きな水路から水を引き、田んぼの中を水が移動しながら次の田に注ぎます。農閑期には家族のために適地を選んで開墾です。西の大川(旭川)には堤防がありません。大水が出るとまた一からやり直しです。しかし上流の腐葉土は稲作には大切な栄養分でした。天候に恵まれると豊作が労苦を吹き飛ばします。活力の再生です。弥生人は稲作の富で他の集団と「部族抗争」をして勢力を拡大して行ったとの通説がありますが、吉備における弥生の終末期には、「環壕集落」の痕跡は見当たりません。抗争の必要がなかったのです。

大首長墓＝楯築遺跡は何を意味するか

RSKバラ園の近くは新幹線の開通以来、科学的な発掘調査が行われ往時の姿を専門の先生方から伺うことが出来るようになりました。足守川の海岸線がバラ園のすぐ隣にあり、大掛かりな港湾施設があったそうです。私は吉備海人の本拠地と思います。ここから瀬戸の穴海を経由して北九州・朝鮮半島・出雲方面にまた南九州から直接中国の江南地方まで交流し、今の畿内から東海に豊富な稲作の「富」を背景に交易したと思います。先人の黒住秀雄先生は吉備の中山がその中心と教えてくださいました。その通りの場所に弥生終末期の港湾施設が存在していたのです。中国の江南から得た知識は「道教」です。楯築遺跡での祭祀は日本列島在来の祭祀だけでは説明できません。薬師寺慎一先生は、集落で行われていた当時の祭祀が、首長のお墓で行うようになったとし、その場所は楯築墳丘墓だと断定なさっています。もしこの楯築の丘で「呪術的な祭祀」が行われていたとすると、それは吉備海人が中国の最新の知識である道教(呪術)を持ち帰り「吉備の首長」に伝授したからではないでしょうか。私は吉備の海人が活躍した証拠がそこにあるように思います。

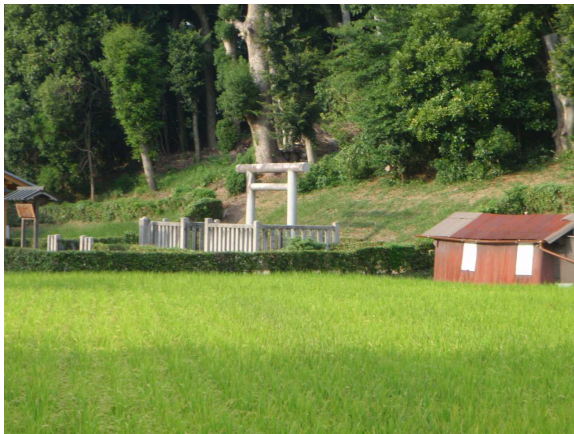
近藤義郎先生は楯築墳丘墓を正確に発掘し ①弥生末期日本列島最大の墓 ②32kgの水銀朱は高品質で中国のもの ③埋葬者は女性のようなとされ、薬師寺慎一先生は、水銀朱は祭祀に使ったと考察なさっています。すると魏志倭人伝に出てくる卑弥呼が祭祀に使った「鏡」と「朱」が直ぐに想起されます。時代もほぼ同じ時代です。私は勝手に、楯築の丘(当時日本列島一番)で卑弥呼(当時列島のTop)が今まで集落で行っていた耕作祭祀を大掛かりに魏志倭人伝に出てくる祭祀を行ったと信じています。皆さんはいかがが想いですか。稲作の富と吉備の海人が先進の中国の情報を持ち帰り、「卑弥呼」が新しい祭祀の方法で人民をまとめた実態が明らかです。九州島北部に上陸した外来の人々によってもたらされた水耕稲作は瞬く間に日本列島を席捲し、最新技術集団はこの吉備地方に移ります。自然発生的な信仰が首長と呼ばれる卑弥呼のような統率者が儀式として神聖な場所で特異な祭祀を背景にしたその発祥の地が、楯築遺跡なのです。吉備地方で儀式に用いられた「特殊器台」は北部九州・出雲・ヤマトへ進展しその後、古墳時代には「円筒埴輪」として長く受け継がれます。また楯築墳丘墓の中心が丸く両サイドに方墳が出た特異な形は片方の方墳を取り除くと前方後円墳となりヤマト発進の前方後円墳の原型＝母体になりました。港湾施設のあったすぐ近くの丘が楯築祭祀の場所です。

吉備祭祀(文化)の東進が古墳時代の始まり

従来大和政権が吉備地方の祭祀を取り入れて前方後円墳と円筒埴輪を定型化したと説明されていますが、私は「吉備の勢力の東進に伴いその技術や祭祀の仕方をヤマトや吉備と同じく他地方から集まった勢力の合意で吉備の主導の基に古墳祭祀が標準化した」と考えています。吉備勢力がヤマト在来の民衆を制圧したのではなく「吉備の進んだ祭祀」を在来者が認めた文化の伝播は高い所から流れ落ちる原理と同じなのです。

既にヤマトには出雲や越(こし)の勢力が琵琶湖を経由して入って来ました。しかし彼らの持つ四隅突出墳に代表される祭祀(文化)より吉備の祭祀(文化)が定着したのは、それだけ支持者が多かったことを意味します。背景に水耕稲作の高等技術(例えば田植えによる稲作・水の管理)と吉備の海人による航海力があります。朝鮮半島の南部に(同じ風俗を持ち多分に言葉も通じた同族)通じていた吉備の集団の持つ新進の文化は、他の日本列島の有力勢力集団を圧倒していたのです。記紀の編者もその辺は認めなくてはなりません。ヤマト草創期に吉備の祭祀(文化)が大きく影響したのは、応神期前後の記述に身近な存在として描かれています。大変友好な関係であったのです。天皇＝大王の妃や采女が地理的に離れた吉備に多く排出し、大和に近い国々からはほとんど出ていません。初期のヤマト草創期は正に吉備の祭祀＝文化の東進そのものでした。

箸墓古墳は吉備祭祀そのものだ



箸墓古墳の正面(宮内庁管理) (22.9.12) 撮影



箸墓古墳の遠景(前方後円墳) (22.9.12) 撮影



まず通説を説明しますと、奈良県の南部桜井市の箸中(箸中古墳とも称する)に存在し全長 278m高さ 30mの前方後円墳で 3 世期中ごろの築造とされ宮内庁は被葬者を やまとととひももそひめのみこと 倭 迹迹日百襲姫 命 として管理していますが、築造年代から魏志倭人伝に登場する倭の女王「卑弥呼」との説が有力です。この古墳は纏向地区に存在する最大の規模を誇る古墳時代初期＝弥生晩期に登場する前方後円墳として定着しています。

そこで私の考えを述べます。岡山には箸墓の 1/2 の浦間茶臼山古墳と 1/3 の網浜茶臼山古墳が同じ時期に築造され通説では箸墓の設計図で築造されたとなっていますが、築造時期は微妙なものです。弥生終末期列島最大の楯築墳丘墓の築造集団が操山から吉備の穴海が眺望できる網浜に築造し、その後東の大川(吉井川)西の浦間に 1/2 の前方後円墳(古来、形がお茶を作るときに用いた臼に似ているので茶臼山と通称していた)を作った。既に出雲勢力が青銅の文化(技術)を持ち込んでヤマト南部(纏向地区)に進出していたが、われらの吉備集団は①楯築から受け継いだ首長の埋葬施設に祭祀の文化と②墳墓の形を前方後円墳にして後円に被葬者を埋葬し前方部で祭祀を行い③吉備の特殊器台で祭壇を作り、当時最有力者＝首長霊を呪術(道教的)祭祀の形で、多くの民衆の支持を得て統治する一定の形が出来上がり、箸墓古墳＝前方後円墳の基本形となったと理解しています。出雲の進んだ金属加工の技術も当時のヤマト集団は重要でした。しかし基本的には農耕にて生活をする弥生の延長に居ますと、心の支え＝信仰が必要です。縄文人から弥生人に受け継がれた精霊崇拜＝信仰から祖霊信仰に移りますが、集団をまとめる何かが必要でした。吉備族が開発した祭祀の文化は、仏教の入ってくる直前の古墳前期の民衆は、吉備集団の進んだ「祭祀」に敬服し、金属加工の新技術は朝鮮半島と密接な関係を持つ出雲族に習い、祭(政)ごとは吉備方式を採用したのです。合理的な考えで今日まで続く我らの祖先に敬服です。吉備族は武力でヤマトを征服したのではありません。弥生末期列島の頂点に立つ「水耕稲作技術」を背景に吉備海人の冒険的好奇心で中華や古代朝鮮から文物を持ち帰り、列島独自の新しい文化がヤマトの地で花開こうとしているのです。

2010.22.11.30